

人間ドックにおける OCT 検査 緑内障・黄斑疾患早期発見の可能性

【目的】

従来の人間ドック健診では、眼底検査、眼圧検査などが眼科関連検査として行われてきたが、視覚障害について十分対応していたとは言い難い。近年、網膜断層像を簡単に撮影することのできる光干渉断層計（以下 OCT）が開発されたことに着目し、人間ドックでの使用が可能かどうかについて検討した。

【方法】

2014 年 4 月から 12 月に当人間ドックを受診し眼底検査を実施した 20,460 例 40,827 眼（平均年齢 52.8 ± 11.1 歳；眼底検査群）と OCT 検査を実施した 1,225 例 2,449 眼（平均年齢 59.1 ± 10.9 歳；OCT 検査群）に対し、緑内障（疑い含む 以下同じ）と網膜疾患についての有所見率を検討した。

【結果】

OCT 検査群から緑内障と判定されたものは 183 眼 8.1%、眼底検査群では 2,252 眼 5.5%と OCT 検査群の方で有意に有所見率が高かった ($p=0.00002$)。網膜疾患における有所見率については、OCT 検査群で 129 眼 5.3%、眼底検査群では 1,671 眼 4.3 %と網膜疾患においても OCT 検査群で有所見率が高くなった ($p=0.02$)。

【結論】

緑内障の有病率は多治見スタディによると 40 歳以上の 5.0%であるが 60 歳代では 6.3%、70 歳台では 10.5%と加齢により増加する。今回の OCT 検査での結果は 40 歳以上では 129 例 10.4%、60 歳代では 37 例 9.4%、70 歳代では 33 例 18.2%であった。網膜疾患全般に関する疫学データは無いが、加齢黄斑変性は久山町スタディによると 50 歳以上の 1.3%であり今回の OCT 検査群では黄斑変性所見 30 例中、加齢黄斑変性は 5 例（0.4%）であった。両疾患に対して OCT 検査は偽陽性の可能性はあるものの断層像検査であることから眼底検査では捉えにくい異常の検出に優れており、早期発見という本来の目的は達成していると考えられる。